

國學院大學学術情報リポジトリ

樺太アイヌ口承テキストの分析と裏返し構造：
最後の話者である浅井タケのトゥイタハ資料から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-07-22 キーワード (Ja): 裏返し構造, 樺太アイヌ, 構造分析, 浅井タケ, トゥイタハ キーワード (En): 作成者: 大喜多, 紀明, Ohgita, Noriaki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000732

〔研究ノート〕

樺太アイヌ口承テキストの 分析と裏返し構造

—最後の話者である浅井タケの トウイタハ資料から—

大喜多紀明

1. はじめに

大林（1979）は、ルーマニアの昔話「兵士としての少女」の構造分析を実施したルーマニアのフォークロリストであるポップの知見を日本に紹介した。それによれば、当該昔話は下記のような対称的な構造である。

- I 【欠如】
 - II 【欺瞞】
 - III 【試練】
 - IV 【暴力】
 - IV' 【暴力の除去】
 - III' 【試練の除去】
 - II' 【欺瞞の除去】
 - I' 【欠如の除去】

つまり、物語の構造的な前半部分に順次出現したテーマは、後半では逆の順序で次々に出現する。かつ、前半と後半で対応するテーマは、例えば【欠如】と【欠如の除去】とように互いに反転した関係にある。大林（1979）はこの構造を「裏返しの構造」あるいは「裏返しによる構造」と呼んだ。本稿ではこうしたテキストの構造上の前半におけるテーマの出現順が後半では逆の順序になり、かつ、同じテーマに相当する前半と後半の箇所どうしが互いに反転関係にある構造を「裏返し構造」と呼ぶことにする。大林（1979）は、日本の異郷訪問譚である「イザナキの黄泉国訪問」、「神功征韓譚」、「浦島子」、「甲賀三郎」が裏返し構造に合致

することみだし、当該構造が異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」であるという仮説を示した。本稿ではこの仮説を「大林仮説」と呼ぶ。

大林仮説の普遍性の程度については、加藤（1979）と依田（1982）が韓国の異郷訪問譚を対象に、大喜多（2014）や大喜多（2015）などでは日本のアニメーション映画を対象に、大喜多（2018）では日本の小説を対象に検証され、いずれも大林仮説の蓋然性の高さが支持された。また、大喜多（2016a）では、アウグスティヌスの『告白録』に対する構造論（宮本2009）が、大林仮説を前提に再解釈された。一方、大林（1979）は、異郷訪問譚といえない物語にこの構造がみとめられるか否かは今後明らかにすべき課題であることを述べた。本稿ではこれを「大林の問題提起」と呼ぶ。

大林の問題提起を受け、大喜多（2016b）ではアイヌ口承テキストにおける、大喜多（2017）では聖書テキストにおける、異郷訪問譚とはいえない物語に裏返し構造がみとめられる実例が示された。つまり、裏返し構造は異郷訪問譚に特異的にみられるものではない。一方、かかる事例検証は十分に実施されてきたわけではない。

以上をふまえ、本稿では、異郷訪問譚とはいえないアイヌ口承テキストを対象に新事例を提示し、裏返し構造が出現する傾向があるか否かを検証することにする。なお、本稿で扱うアイヌ口承テキストは、樺太アイヌの口承話者である浅井タケの、すでに採録され、資料化されたトゥイタハである。

2. 異郷訪問譚

異郷訪問譚とは、通念上では、主人公が異郷を訪問する物語の形式をいう。塩入（1992：102）は、当該形式における異郷の特徴を次のように述べた。

異郷は人間の憧れの地であり、余程の幸運がない限り訪れることのできない場所である。しかし、ひとたび訪れることができれば大きな幸運なり富を得られる場所でもあった。ただし、禁を破ればまたたく間に現実世界に引き戻されるか、ひどい目に会う恐れもあった。それが中国では東方の海のかなたに神仙の住む蓬莱山として作り上げられたのであり、日本の文献浦島に取り入れられたのである。

主人公が訪問する異郷は、憧れの地であるが到達が困難な地でもある。さらに、訪問により主人公は報酬を得るが、禁を破れば報酬は得られず、むしろ罰を被る。本稿ではこれを「塩入の特徴」と呼ぶ。また、西條（2009）によれば、異郷訪問には下記の特徴がみとめられる。

- ① 異郷に入るときは、偶然に行く
- ② 異郷での体験は、異常体験である
- ③ 異郷から出るときは、自分の意志で出る
- ④ 異郷から出た後、主人公は変化する

上述の①～④をそれぞれ「西條の特徴」の①～④と呼ぶ。本稿では、塩入の特徴および西條の特徴を「異郷訪問譚の特徴」と呼び、かかる異郷訪問譚の特徴のすべてに合致する場合には異郷訪問譚と呼ぶことにする。

3. テキスト

本稿では、樺太アイヌ話者である浅井タケ（1902–1994）が口述した3編のトゥイタハである「カニの話」（1988年8月8日採録）、「アキアジの話」（1987年5月4日採録）、「魚の尾びれの話」（1988年5月22日採録）をテキストとする（村崎1999）。なおテキストは、もともとは樺太アイヌ語で語られた音声を村崎が採録し日本語に翻訳したものである。村崎（2012：6-7）は浅井を樺太アイヌ語の「完璧な話者」と位置付けた。トゥイタハとは、樺太アイヌの口承文芸における一ジャンルであり、一般的には「昔話」とみなされる（例えば、阪口2019）。

以下、3編のテキストを村崎（1999）より転載する。テキストに付したアルファベットと記号は筆者による。なお、3編のテキストにおける挿入歌の箇所については、村崎（1999）では日本語訳の記載がない。

<カニの話>

〔A→〕 サンヌピシ村に一人の男が妻と一緒に住んでいたとき。妻と一緒に住んでいてマキをとりに山へ行ってはマキを炊き、魚をとっては食べ、していたが、ある日女がユリ根を掘りに山へ行ったとき。〔←A〕〔B①→〕 それで山へ行ったあとで男は妻に玉の付いたフンドシを注文したとき。（玉のついたフンドシ？M）⁽¹⁾ うん。フンドシ。tepaはフンドシのことだ。玉のついたフンドシを作って妻は夫にあげてからユリ根掘りに山へ行ったとき。それから、その男は、浜辺で、川に出て、海に出て、浜辺に座って、歌ったとき。

'amukita 'amukita monimahpo
yanuwa hetaa, tuntu nii,
riih rih see
'amukita 'amukita monimahpo,
yanuwa hetaa, tuntu nii,
riih rih see

と言ったとき。そうしているうちに海の方から、「いま泳いでいくよ いま泳

いでいくよ。」と言うので、見たら、子どもが一人、浜にあがってたとさ。子どもが一人あがったのを見たら、カニだったとさ。カニがあがって、男のそばにやって来て、男の食べ物であれやこれやと食べたとさ。食べてたべて、男の玉のついたふんどしから玉をぬいてしまったとさ。ぬいてぬいてしまってから、それから、海の沖の方へ出ていったとさ (笑声)。その後で、男は家に帰って、またその食物を食べたとさ。女が山から帰って来たとき。山から下りてきてヤマユリ根も煮てたべたとさ。[←B①] [B②→] そうしているうち、またある日男は女が山に上っていった後で、またその玉のついたフンドシを注文したとき。そうしてまた女は玉のついたフンドシを作って夫にあげて自分は山へ上っていったとき。その後で男はそのフンドシをもって食物も作ってハンカタにそれを入れたとき。サラニヒに入れて抱えて、それから浜の方へ下りて、それから下りて浜辺でまた歌ったとき。

'amukita 'amukita monimahpo
yanuu hetaa
tuntu nii riih rih see
'amukita 'amukita monimahpo
yanuu hetaa
tuntu nii riih rih see

と言ったとき。そうしたら、海の方から、「いま泳いでいくよ、いま泳いでいくよ。」と言ったとき。上がってくるのを見たら一人の子どもが泳いで上がってくるのを見たら、カニだったとき。そして、男が作ってサラニヒに入れた食べ物を食べてそれから、男の玉のついたフンドシの玉を抜いて抜いてしまってた、海の沖の方へ出ていったとき。その後で、家へ帰って火をたいたとき。女が山から帰ってきてその男、その夫が、たった今寝床から寝て起きたばかりの人のようにして、火を炊いているのを見たのだった。[←B②] [C①→] そうしてから、しばらくたったある日、その男はマキとりに山に行ったとき、山の方へ。マキとりに山に行くとその後でその女は「どうしてこの男こうなんだろう。(どうして) 毎日毎日、今寝たばかりの人のようにしているんだろう。」と思ったから、いま玉のついたフンドシを作ってから浜に下りて、今夫がいなくなった後で、浜に下りて行って歌ったとき。

'amukita 'amukita monimahpo
yanuu hetaa tuntu nii
rihrih see
'amukita 'amukita monimahpo
yanuu hetaa tuntu nii
rihrih see

と言っていると、海の方から子どもが一人上がってきて、後頭部 (まちがえ

た) おでこを押さえて上がって来たとき。上がって来て、「ねえ、男。お前の声がちょっと違うから上がって行かないよ。」と言って入ったとき。海へ入って行ったとき。すると、その女は「あのねえ、風邪をひいたのだよ。風邪をひいたから、私の声が変わったのだよ。」と言ったとき。そうして今その男、いや娘が海の方から、「泳いでいくよ、泳いでいくよ。」といってあがってきた。見るとカニだったとき。カニが来て、女の食べ物サラヒニに入れたものをそこで食べたとき。食べてしまってから、その女は、カニがフンドシの玉を抜こうとしたところを、その頭を叩いて頭をつぶして、カニは死んでしまったとき。それからそのカニを持って家へ帰って、煮て食べて、それから頭や…、(足の) 殻をみんないろいろの穴へあけてから、いろいろの穴の中へ殻を入れておいたとき。そして今、男が山から下りて来たとき。[←C①] [C②→] マキをとって帰って来て、今ごはんを食べてから、その女はまたユリ根掘りに山へ行ったのだとき。行った後でその女、デナイ、その男は今玉のついたフンドシを作って浜へ下りて行ったとき。浜へ下りて行って歌った。

'amukita 'amukita monimahpo
yanuu hetaa tuntu nii
riih rih see
'amukita 'amukita monimahpo
yanuu hetaa tuntu nii
riih rih see

と言ったとき。そう言っているうちに、海の上が動いたとき。それで、(大きい声でお願いします。M) 動いた。海の水が動いた。そうして、「ねえ、男、お前の声が違うので上がって行かないよ。」と言ったとき。そう言ったので、その男はこう言ったとき。「あのね、風邪をひいたから、私の声が変わったのだよ。」と言ったとき。そうしてそれからまた、

'amukita 'amukita monimahpo
yanuu hetaa tuntu nii
riih rih see

と言いながら、海の上から海の水が動いたとき。そうしてから海の上から「泳いでいくよ。泳いで行くよ。」と言って上がって来たとき。「実はね、男。お前の妻の女が、こんなふうにして私が行くと、私を叩いて、私を殺してしまって、今私の魂だけがあるんだ。」と言ったとき。魂だけがあると言って、そのまま沖へ帰って行ったとき。行ったとき。そうしてその後で男は今家へ帰ったとき。家へ帰って今そこで寝たとき。そうしているうちに、女が山から帰って来た。ユリ根掘りをして下りて来たとき。[←C②] [D→] 下りて来て、男はいろいろの方を見ると、いろいろの穴の中にカニの殻が入れてあったとき。入れてあったから、「本当に女がカニを殺したんだな。」と思ったので、そこ

で妻を叩いて叩いてから殺して外へ投げたとさ。そうしてから一人で暮らしたとさ。一人でいるうちに、白鳥たちが空を飛びながらもこう言ったとさ。

takahka so'eere, yaysame koo kohko.

takahka so'eere, yaysame koo kohko.

と、なきながら飛んで行ったとさ。飛んで行ったんだ。だから男は、それが恥ずかしくて本当に今ふとんをかぶって寝たけれども、死にはしなかったとさ。それから起き上がって、家の中のものを、片付けていると、針刺しが見つかったとさ。その針刺しを見たら、中に太いクツを作る針が刺してあったとさ。その針をとって、その脇の下から針を入れて刺したとさ。刺して、そこで、男は死んだとさ。それで終わり。[←D]

＜アキアジの話＞

[A→] ある村に一人のババが娘たちを育てていたとさ。娘たちを、3人の娘を育てた。育てて、今マキを取って来てはくべ、魚を捕っては食べ、こうしているうちにその娘たちは今みんな大きくなったとさ。大きくなってそしてババはある日（テープ切れる）家から外へ出た。出たとき。出てからいなくなってしまったとさ。帰って来なかったとさ。それでその娘たちは外に出てみたら川辺におりてみたら大きいあきあじが、そこに上がっていたとさ。海（の上）から上がっていたとさ。それからそのあきあじを取り上げて、持って帰ってこんどそれを3人娘だから3つに切ったとさ。3つに切って、その一番上の娘はその、頭の方を枕にした。それから、中の娘はその、真中のところを枕にした。また一番末の娘はその、尻尾の方を、枕にしたとさ。それからその、ババがいなくなったから、泣いたとさ。自分たちのババを思い出して泣いたとさ。魚を切って、3つに切ってそれを枕にして泣いた。[←A]

[B→] しばらく泣いて、それから、それからまたすぐ食事の仕度をして食べて、自分たちで炊事をしてしばらく暮らしていたが、ある日、娘たちは外に出て何かしてか、外に出たとき。外に出て、しばらくするとその家の中から、何だか踊り歌が聞こえたとき。

noske hunkante uuoh ee uuoh

okio iikante uuoh ee uuoh

saraku uukante uuoh ee uuoh

という踊り歌がしたとき。それだから、見ようと思ってみたらその、何もかもどこかへ行っていなかったとき。あのおその枕、自分たちの枕にしたものも、みんなあったのに、その踊り歌の人たちもみんないなかったとき。[←B]

[C→] それでこんど、その後にもまたそこにいたのだが、ある日また外に出て、またしばらくしてからまた家の方から踊り歌が聞こえたとき。

noske hunkante uuoh ee uuoh

okio iikante uuoh ee uuoh

saraku uukante uuoh ee uuoh

そこからその戸の隙間からのぞいてみたら、その自分たちのババがあきあじになってそれを切ったもの、その頭も枕にしたものもその頭の方もみんななくなっていたとき。どこかへ、どこからかなくなってしまうたとき。頭の方は一番上の娘がその、枕にした頭だったとき。それから真中の娘はその、真中のところを切ったところを枕にしたものだったとき。それから末っ子の娘はその、尻尾のところを枕にしていたとき。それもみんななくなっていたとき。[←C] [D→] それで今、それから外に出たら、踊りながらその家の方から踊り歌が聞こえたとき。見たら、それはその娘たちのババだったんだとき。あきあじだと言ったのがそうではなくて自分たちのババだったんだと。それを3つに切って末娘は尻尾の方を枕にした。それから真中の娘はその真中のところを枕にした。そうしてあの一番上の娘は、その頭の所を枕にしたのだとき。それはみんなあの自分たちのババだったんだとき。それからそれを見て娘たちはみんな逃げたととき。そしたらババは言ったとき。自分もう年を取ったから自分の故郷の浜に行くから娘たちに3人で仲良く暮らしなさいと言って浜に行ってしまった。そして海の中に入って行った。その後は娘たちだけ残ったが、3つに切った枕たちもみんな海に戻ってしまったとき。そういう昔話もあるんだ。(終わった?もう終わったの?M)(その踊り歌は何だったの?M) 踊り歌か?娘は、下の娘は尻尾の方を枕にして、それから真中の娘は真中のところ、そうして一番上の娘は頭の方を枕にして

noske hunkante uuoh ee uuoh

okio iikante uuoh ee uuoh

saraku uukante uuoh ee uuoh

といって踊ったんだと。それは、そのババの魂が、こうやって歌ってるんだとき。(ああそうか。ババの魂が歌ってるんだ。M) [←D]

<魚の尾びれの話>

[A→]サンヌビシ村に、一人のババが孫娘、3人の娘と住んでいたとき。(うーん。M) 3人娘がいて、そのババと一緒にいたんだとき。ババと一緒にいて、山にマキとりに行ってはくべ、魚とりに行っては食べ、ユリほりに行っては食べ、こうして暮らしていたが、ある日その娘たちのババがどこかへ行っていないなくなってしまったとき。どこかへ行ってしまうて、その後ずっと娘たちは探して、浜に出て見たら、そこにアキアジが一匹浜にあがっていたとき。浜に上がっていて、それをとって持って帰り、切った、3つに切ったとき。切って、そのいちばん姉の娘はその頭の部分を枕にした。それから真中の娘は中の部分を枕にした。いちばん末娘はその尻尾の部分を枕にした。そうし

て泣いたとき。自分たちのババを思っているも泣いていたが、毎日そうしていたが、[←A] [B→] それからある日浜に出たとき。浜に出て行った時、その家の方から、遊ぶ声がしたとき。

'e 'uu 'oh, 'e 'uu 'oh
 'oki'oo 'iikante, 'e 'uu 'oh, 'e 'uu 'oh
 sarake 'iikante, 'e 'uu 'oh, 'e 'uu 'oh
 noske 'uukante, 'e 'uu 'oh, 'e 'uu 'oh

と遊ぶ声がしたとき。そのように遊ぶ声がしたので、それから家へ帰ったら、その娘たちの枕がみんななくなっていたとき。(ふーん。M) みんななくなっていて、ただ娘が3人だけ残っていたとき。そうして今度はまた浜に出て歩きながら遊んでいると、また家の囲りから遊ぶ声がしたとき。

noske 'uukante, 'e 'uu 'oh, 'e 'uu 'oh
 'oki'oo 'iikante, 'e 'uu 'oh, 'e 'uu 'oh
 sarake 'uukante, 'e 'uu 'oh, 'e 'uu 'oh
 noske 'uukante, 'e 'uu 'oh, 'e 'uu 'oh
 'oki'oo 'iikante, 'e 'uu 'oh, 'e 'uu 'oh

と遊ぶ声がして、そっと見に行って、戸口からのぞいて、行って見たら、そこに3人の娘がいて遊んでいたとき。そうしてそこへ走って行って入って、逃げようとするのを走って行ってつかまえたとき。一人つかまえたと思ったらそこには3人みんないたとき。それで、娘の一人は 'oki'oymah (頭の娘) と言ったとき。一人は sarakewkante (尻尾の娘) という名前をつけたとき。いちばん姉娘は sarake'oki'oy (尻尾の頭の娘)、一人は 'oki'oykante、一人は sarakewkante、もう一人は noskewkante (真中の娘) と言って3人の娘がいたとき。[←B] [C→] それで、今これで6人そこにいたとき、娘たちが。娘たちが6人いて、ある日また、浜に出て遊び、また帰ってきて、また、浜に出て遊んでいると、浜に何か動物たちが遊んでいて、こんな声がしたとき。

kurum posikii kahkoo
 kurum poyakaa kahkoo
 masasimo kontee kahkoo
 'antuurihkaa

という声がしたとき。(娘たちは) びっくりして、逃げて帰って来たら、その家には娘たちが3人またいて、料理を作ってユリ根掘りをして来て料理して、その娘たちも入って一緒に食べたとき。[←C] [D→] 食べてから、またある日に、浜に出ていると、すると、浜に舟が一艘上がったとき。舟が一艘上がって、そこに3人の男がいて、陸に上がって浜に下りて、こう言ったとき。「私はいちばん兄の男で、masasimokonteというんだ。それから真中の男は kurumposikiで、いちばん小さい下の男は masasimokonte という。それから、

もう一人いるんだ。それはいちばん兄の男なのだ。それは'antuurihkaという。」と話しながら、そこに入ってきた。家に入って娘たちと男たちは皆喜んで、4人の男たちは喜んで、喜んで、おいしいごちそうを作って食べさせて、しばらくいたが、ユリ根掘りをしては食べ、男たちは魚をとりに行っっては食べなどしていたが、その男たちはみんなその娘たちと結婚したとき。一緒になって幸せに暮らして、みんなそれぞれ家を建てて暮らしたんだが…そうしている中にみんな今は子どももできて、空飛ぶ鳥も羽を落とし、その羽を拾ってホウキやハシを作ったということだ。そういうお話だ。[←D]

4. テキストは異郷訪問譚といえるか

本節では、テキストが異郷訪問譚といえるかについて、「カニの話」、「アキアジの話」、「魚の尾びれの話」のそれぞれを、塩入の特徴および西條の特徴と照合し判別することにする。

4.1. カニの話

まずは「カニの話」についてである。

◆塩入の特徴

テキストの主人公は「男」である。「男」の妻が山に行く間に「男」は海岸を訪れて「カニ」と会う。この海岸は、「男」にとっての「憧れの地であり到達が極めて困難な地」とはいえない。かつ、かかる海岸への訪問により「男」は、「カニ」と会うという報酬を得たといえるが、禁は提示されていない。以上より、テキストは塩入の特徴と合致しているといえない。

◆西條の特徴①

「男」が訪れた海岸は日常の空間であり異郷とはいいがたい。仮に異郷とみなしたとしても、かかる訪問は偶然ではなく、あくまでも「男」の意思による。したがって、テキストのストーリーは西條の特徴①と合致しているといえない。

◆西條の特徴②

「男」は海岸で「カニ」と会い、食事および「フンドシの玉」を与えた。「カニ」に食事を与えることは異常体験であるとはいえない。一方、「フンドシの玉」を与えることは異常体験であるといえなくもない。しかしながら、「男」が体験した場所は海岸であって異郷とはいえない。したがって、テキストは西條の特徴②と合致しているといえない。

◆西條の特徴③

そもそも「男」は異郷を訪問していない。よって、自身の意思による異郷からの退出もないため、テキストは西條の特徴③と合致しない。

◆西條の特徴④

「男」は異郷への侵入と退出をおこなわない。したがって、当然に異郷への訪問による変化もないため、テキストは西條の特徴④と合致しない。

以上より、テキストは、塩入の特徴および西條の特徴①～④のすべてに合致しないため、異郷訪問譚とはいえない。

4.2. アキアジの話

「アキアジの話」についてである。

◆塩入の特徴

テキストの主人公は「3人の娘」である。テキストでの「3人の娘」の活動は「家」と「川辺」に限定され、これらの場所は彼女たちにとっての「憧れの地であり到達が極めて困難な地」とはいえない。強いていえば、「パパ」が行ってしまった「自分の故郷の浜」は、「3人の娘」にとっての「憧れの地であり到達が極めて困難な地」である可能性があるが、「3人の娘」はその場所に訪問していない。したがって、テキストでは主人公は異郷に訪問したとはいえないので異郷訪問にともなう報酬や禁もない。以上より、テキストは塩入の特徴と合致していない。

◆西條の特徴①

「3人の娘」は、「家」と「川辺」を訪れたが、彼女らにとっての異郷は訪問していない。したがって、異郷への偶然の侵入もないため、テキストは西條の特徴①とは合致しない。

◆西條の特徴②

そもそも「3人の娘」は異郷を訪問しないので異郷での異常体験もない。敢えていえば、彼女たちが枕としていたアキアジがなくなる出来事が異常体験である可能性はある。だが、この体験は異郷での出来事ではない。したがって、テキストは西條の特徴②に合致しない。

◆西條の特徴③

「3人の娘」は終始「家」と「川辺」におり、異郷を訪問しないので、必然的に自分の意思による異郷からの退出もない。よって、テキストは西條の特徴③に合致しない。

◆西條の特徴④

テキストには、「3人の娘」による異郷への訪問が描かれておらず、かかる訪問にともなう「3人の娘」の変化もない。したがって、テキストは西條の特徴④に合致しない。

以上より、テキストは異郷訪問譚の特徴のすべてに合致しないため、異郷訪問譚とはいえない。

4.3. 魚の尾びれの話

「魚の尾びれの話」についてである。

◆塩入の特徴

テキストの主人公は「3人の娘」である。「3人の娘」は、「ババ」と暮らしているときは、日常の生活をしていた。「ババ」がいなくなったあとの活動場所は「家」と「浜」である。また、結婚後はそれぞれの新しい「家」である。したがって、テキストには、「3人の娘」にとっての異郷としての「憧れの地であり到達が極めて困難な地」は描かれていない。また、かかる異郷への訪問もないため、訪問にとまなう報酬や禁もない。よって、テキストは塩入の特徴とは合致しない。

◆西條の特徴①

「3人の娘」は「ババ」がいる期間、いなくなった期間、結婚後の期間のすべてにおいて異郷を訪問しない。したがって、当然に主人公による異郷への偶然的訪問もないため、テキストは西條の特徴①と合致しない。

◆西條の特徴②

「3人の娘」は彼女たちにとっての異郷を訪問せず、異郷での異常な体験もない。アキアジの「枕」がなくなることは異常な体験であるといえるが、この出来事も異郷におけるものではない。よって、テキストは西條の特徴②に合致しない。

◆西條の特徴③

「3人の娘」はそもそも異郷を訪れないため、異郷からの自分の意思による退出もない。よって、テキストは西條の特徴③には合致しない。

◆西條の特徴④

「3人の娘」は異郷を訪問しない。したがって、主人公の異郷での変化も存在しないため、テキストは西條の特徴④に合致しない。

以上より、テキストは異郷訪問譚の特徴のすべてに合致していないため異郷訪問譚とはいえない。

5. 構造

本節では、3編のテキストのそれぞれに付した区分にしたがった図式を示し、各テキストが裏返し構造といえるかの検討をおこなう。ここで、各テキストに付した記号は、区分を示す指標である。ここで、例えば、[A→]と[←A]で挟まれた範囲を[A]と呼ぶことにする。同様に、[B→]と[←B]に挟まれた範囲を[B]、[C→]と[←C]の場合は[C]、[D→]と[←D]の場合は[D]とし、アルファベットの後に丸番号が付いた場合も同様に[B①→]と[←B①]に挟まれた範囲を[B①]などとする。

5.1. カニの話

まず、「カニの話」の作図をおこなう。なお、この図式を「カニ図①」と呼ぶ。

〔A〕：＜暮らし＞夫婦の日常

〔B①〕：＜カニとフンドシの玉＞現実のカニが玉を持ち去る

〔B②〕：＜カニとフンドシの玉＞現実のカニが玉を持ち去る

〔C①〕：＜カニとフンドシの玉＞死んだカニが玉を持ち去らない

〔C②〕：＜カニとフンドシの玉＞死んだカニが玉を持ち去らない

〔D〕：＜暮らし＞夫婦の死

ここで、〔A〕には、「男」とその妻が日常の生活が描かれている。それに対し〔D〕では、「男」が妻を殺し自らの命を絶つ。それにより「男」とその妻の日常は否定され終結する。つまり、〔A〕と〔D〕は、ともに「男」と妻の＜暮らし＞がテーマであるが、〔A〕では＜暮らし＞が日常であるのに対し、〔D〕では日常の否定および終結であり、双方は反転している。〔B①〕では、妻が山に行っている間に「男」は浜に行き、海からきた「カニ」に食事を与え、フンドシの「玉」を取らせた。引き続き〔B②〕では〔B①〕の話が繰り返される。それに対し、〔C①〕は、「男」に不信した妻が、「男」が山に行ったときを見計らい、「玉」が付いたフンドシをつけ、夫の代わりに浜へ行った。妻は、海からきた「カニ」を殺す。「カニ」は「玉」を持ち帰らず、妻により食べられてしまう。また、〔C②〕では、妻に不信した「男」が、「玉」の付いたフンドシをつけて浜に行く。すると「カニ」は海からくるが、すでに魂だけの存在になっており、「男」の妻に殺されたことを「男」に告げた。そのうえで「カニ」は「玉」を抜き取ることなく海へと帰る。つまり、〔B①〕、〔B②〕、〔C①〕、〔C②〕のすべては＜カニとフンドシの玉＞をテーマとしているが、〔B①〕と〔B②〕では現実のカニが玉を持ち去る一方で、〔C①〕と〔C②〕では死んだカニが玉を持ち去らないため、双方は反転している。ここで、〔B①〕と〔B②〕および〔C①〕と〔C②〕はそれぞれ2組の要素で構成されているのだが、〔B①〕と〔B②〕および〔C①〕と〔C②〕をそれぞれまとめて〔B〕および〔C〕とみなしても支障がないといえる。そうすれば、上記の図式は次のように置換できる。本稿ではこれを「カニ図②」と呼ぶことにする。

〔A〕：＜暮らし＞夫婦の日常

〔B〕：＜カニとフンドシの玉＞現実のカニが玉を持ち去る

〔C〕：＜カニとフンドシの玉＞死んだカニが玉を持ち去らない

〔D〕：＜暮らし＞夫婦の死

なお、ここでの〔B〕は、〔B①〕と〔B②〕を統合した区分を指し、〔C〕は〔C①〕と〔C②〕を統合した区分を指す。

5.2. アキアジの話

続いて「アキアジの話」の作図をおこなう。

- 〔A〕：＜アキアジと3つの枕＞制作と慰藉
- 〔B〕：＜踊り歌と3つの枕＞現存
- 〔C〕：＜踊り歌と3つの枕＞消失
- 〔D〕：＜アキアジと3つの枕＞消失と逃走

〔A〕では、「パパ」が姿を消すかわりに、「アキアジ」が海からあげられる。「3人の娘」は、「パパ」がいなくなった悲しみを慰めるため、「アキアジ」を3つに切り分けてそれぞれの枕にする。それに対し、〔D〕では、「アキアジ」の正体が「パパ」であったことを娘たちが知って逃げ出す様子が描かれている。この時点では、すでに「アキアジ」で制作した枕は消失している。つまり、〔A〕と〔D〕のテーマはともに＜アキアジと3つの枕＞であるのだが、〔A〕では「アキアジ」の出現とともに娘たちが3つの枕を制作し、逆に〔D〕では、「アキアジ」の枕は消失している。また、〔A〕では、かかる枕により娘たちは慰藉されるが、逆に〔D〕では、「アキアジ」の正体を知った娘たちが逃走している。こうした「制作と慰藉」と「消失と逃走」は反転した関係である。また、〔B〕と〔C〕では、まず家の中から踊り歌が聞こえてくることが書かれており、そのうえで3つの枕の所在が述べられている。したがって、当該〔B〕と〔C〕は＜踊り歌と3つの枕＞がテーマである。ここで、〔B〕には、踊り歌の記載の後に3つの枕が現存することが描かれているが、〔C〕では当該枕が消失したことが述べられており、双方は反転している。

5.3. 魚の尾びれの話

「魚の尾びれの話」の作図をおこなう。

- 〔A〕：＜暮らし＞パパの消失と3人の娘の悲しみ
- 〔B〕：＜アキアジの娘との会遇＞逃げるアキアジの娘
- 〔C〕：＜アキアジの娘との会遇＞逃げる3人の娘
- 〔D〕：＜暮らし＞4人の男の登場と3人の娘の幸せ

〔A〕には、もともと「パパ」と「3人の娘」が暮らしていたこと、「パパ」が突然いなくなったこと、「アキアジ」が浜に上がり、これを三分して「3人の娘」の枕としたこと、その「アキアジ」を枕として娘たちが泣いていたことが書かれている。それに対し〔D〕には、浜から「4人の男」がやってきて娘たちと結婚し、幸せな生活が開始したことが書かれている⁽²⁾。ここで、〔A〕と〔D〕はともに、

＜暮らし＞をテーマとしているのだが、[A]には「ババ」の消失と「3人の娘」の悲しみが述べられているのに対し、[D]には「4人の男」の登場と、新しい幸せな生活を始めた娘たちが述べられており、双方は反転している。また、[B]と[C]はともに＜アキアジの娘との会遇＞が描かれている。[B]では、まず、「3人の娘」が、別の3人の娘（これを「アキアジの娘」と呼ぶ）が遊ぶ声を聞き、それに近づいていくと、「アキアジの娘」は逃げて行く。そして「3人の娘」が「アキアジの娘」をつかまえることで双方が会遇する。それに対して[C]では、「3人の娘」が浜で何かの動物たちの声に驚き家に逃げ帰ることで「アキアジの娘」と会遇する。つまり、双方は逃げた結果「3人の娘」と「アキアジの娘」が会遇する点で同一だが、[B]で逃げたのが「アキアジの娘」であるのに対し、[C]では逆に、逃げたのは「3人の娘」である。

5.4. まとめ

5.1から5.3節では、各テキストに付した区分にもとづく構造分析を実施した。その結果、各テキストは、構造上の前半と後半におけるテーマの出現順序が逆転し、かつ、それぞれ照応するテーマの内容が反転していた。以上は、1節で示した裏返し構造の特徴と合致する。したがって、議論した3編のテキストはすべて裏返し構造である。

併せて、4節では、各テキストが異郷訪問譚ではないことがあらかじめ示されていたことから、本知見は、異郷訪問譚ではない物語に裏返し構造がみとめられた新事例の提示であり、かつ、異郷訪問譚ではないアイヌ口承に裏返し構造が出現する傾向があることを示唆するものでもある。

6. おわりに

本稿では、樺太アイヌの口承話者である浅井タケの、村崎（1999）における3編のトゥイタハをテキストとし、当該テキストが裏返し構造といえるかの検証をおこなった。そもそも大林（1979）は、裏返し構造を異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」と位置付けた一方、異郷訪問譚に限定的に出現する構造であるか否かについては、大林（1979）は今後の課題とした。

異郷訪問譚とはいえないテキストに裏返し構造がみとめられるかについては、アイヌ口承テキストおよび聖書テキストにおいて幾許かの事例が示されてきたが、とりわけアイヌテキストでは十分な事例数が提供されてきたわけではない。以上を受け、本稿の目的は、異郷訪問譚とはいえないアイヌテキストにおいて新事例を提示し、裏返し構造が出現する蓋然性を検証するところにあった。

まず、4節での検証の結果、3編のテキストは異郷訪問譚とはいえないことが確認された。そのうえで、5節では、当該口承テキストが裏返し構造といえるか

を検証した。その結果、3編のテキストはすべて裏返し構造からなることがみとめられた。以上の結果は、異郷訪問譚とはいえないアイヌ口承テキストにおいて裏返し構造が出現する傾向があることを示唆するものであった。筆者としては、当該蓋然性の検証を引き続き実施する予定である。

注

- (1) 「M」を付したカッコ内は採録者である村崎の発話である。「M」は村崎を指す。
- (2) テキスト本文には「逃げようとするのを走って行ってつかまえたとき。一人つかまえたと思ったらそこには3人みんないたとき」と書かれている。「3人の娘」は、逃げる「アキアジの娘」のうちの一人を捕まえたのであるが、同時に3人を捕まえていた。このことは、3人の「アキアジの娘」は実は一人であることを示している。つまり、「3人の娘」と合算すれば、娘の人数は合計4人である。それに対し、娘たちのところに訪れた男は4人であり、男と娘の人数は合致している。

引用文献

- 大喜多紀明、2014、「アニメーション映画『千と千尋の神隠し』にみられる二重の異郷訪問譚構造について：ミハイ・ポップの「裏返し」モデルを適用した場合」『国語論集』、(11)、77-89、北海道教育大学釧路校国語科教育研究室。
- 大喜多紀明、2015、「アニメーション映画『となりのトトロ』の構造分析：メイがかかえたトウモロコシ」『国語論集』、(12)、76-91、北海道教育大学釧路校国語科教育研究室。
- 大喜多紀明、2016a、「アウグスティヌス『告白録』1～9巻のキアスムス構造に関する考察：異郷訪問譚の構造的特性が構成に与えた影響」『人間生活文化研究』、(26)、542-550、大妻女子大学人間生活文化研究所。
- 大喜多紀明、2016b、「アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造：異郷訪問譚によらない事例」『北海道言語文化研究』、(14)、45-72、北海道言語研究会。
- 大喜多紀明、2017、「聖書『創世記』冒頭の5つの物語の構造：異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例」『北海道言語文化研究』、(15)、195-216、北海道言語研究会。
- 大林太良、1979、「異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』、(2) 1-9、日本口承文芸学会。
- 加藤泰、1979、「済州島の二つの神話の構造分析」『民族学研究』、44 (1) 83-90、日本民族学会。
- 西條勉、2009、『千と千尋の神話学』、新典社新書。
- 阪口諒、2019、「アイヌ語樺太西海岸南部方言テキスト (1)：「カワウソのばけもの」」『北方言語研究』、9、131-144、日本北方言語学会。
- 塩田秀敏、1992、「口承文芸と民族のこころ：昔話「浦島太郎」を中心にして」『生きる』、99-106、上田女子短期大学公開講座。
- 宮本久雄、2009、「アウグスティヌス文学のヘブライ的地平：『告白録』第一～九巻における「キアスムス（交差対応的配列法）」構造」『パトリスティカ』、(13)、142-148、教父研究会。
- 村崎恭子（編訳）、1999、『浅井タケ昔話全集 I, II』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、http://www.aatufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/murasaki/asai01.html、(2023年12月5日閲覧)。
- 村崎恭子、2012、「話者の絶えた樺太アイヌ語：その終焉と再生の可能性」『社会言語科学』、14 (2)、3-16、社会言語科学会。
- 依田千百子、1982、「韓国の異郷訪問譚の構造」『口承文芸研究』、(5) 47-57、日本口承文芸学会。